

# 書評レポート 『歴史と英雄』

目次

はじめに

1. フィリピン史におけるフィリピン革命

2. 『英雄の捏造』を読む

3. グレン・メイへの反論

おわりに

## はじめに

本稿では、永野善子の『歴史と英雄』について論じる。筆者はこれまでに、フィリピンの英雄であるホセ・リサルについて考察を続けてきた。先には、池端雪浦の『フィリピン国民国家の原風景』について論じた。今回も、その発展形式で述べるというのが当初の予定であった。そんな折に見つけたのが、このブックレットであった。しかし読んでみると、この論文が今まで筆者が読んできたものとは別種のものであるということに気付いた。今までに筆者が触れた文献は、一人の研究者が問題を提起して、解決していくという内容のものであった。しかし、この論文では、何人かの研究者の論争について触れ、その謎を解明するという未知の形式であり、扱われる英雄も今までと違い、ホセ・リサルではなかった。内容がリサルではないことはさておき、研究者たちの論争を話題の中心に据えるという形式が今までに体験したことがないものであり、筆者を引き付けたのである。したがって、本稿ではリサルからは離れ、フィリピン革命における英雄像をめぐる近年の論争を扱ったこの論文について考えたい。

具体的には、本論1で、著者である永野が考えるフィリピン史について述べる。次に本論2で、フィリピン革命の英雄像に異議を唱えるアメリカ人の本を読んだ著者の見解について述べる。最後に本論3では、その本の著者への反論を扱ったフィリピン人の本を媒体として、著者が考えるポストコロニアルについて論じる。そして最終的には、今まで筆者が考察してきたフィリピンの英雄ホセ・リサルとの接点を見付け出したい。

### 1. フィリピン史におけるフィリピン革命

著者の永野は、フィリピン革命がフィリピンの歴史の中で最も重要な出来事であるとし、その今日的意義について論じている。その意義には主に二つのものがある。一つ目は、フィリピン革命が、フィリピン人が自らの手で植民地独立闘争を通じて、はじめて独立国家を樹立した革命であるということ。二つ目は、フィリピン革命からおよそ百年が経過し、その時間的重みが大変大きいということである。ここで筆者は、二つ目の視点に注目した。具体的に言えば、フィリピン革命から今日までの時間の連続性に重きを置いているという点である。当時の資料を手がかりとするだけでなく、その時点から現在における時間の連続性に注目するという考え方は斬新である。このような視点を持ったことにより、著者は1992年までにフィリピンにおける米軍基地がすべて撤収され、フィリピンが米比関係を軸とした対外関係を改め、アジアとの関係を密にしていこうという政策の転換とフィリピン革命とのつながりを鮮やかに説明したのだ。当時の書簡だけに頼るという姿勢では、このような考えは浮かばない。ここで筆者は、時の連続性に注目すると浮かび上がる事実の重要性を実感した。

ここまでの記述でも分かることだが、フィリピン革命期とアメリカ植民地期との間には密接な関係があると著者は述べている。アメリカの対フィリピン政策は、現在もなおフィリピン社会に大きな影響を及ぼしている。こういった視点から、著者はフィリピン革命における英雄像をめぐる論争を取り上げて、ポストコロニアルについての思いを述べている。その媒体として、アメリカのオレゴン州立大学のグレン・メイの『英雄の捏造』を用いている。

『英雄の捏造』は、メイがアンドレス・ボニファシオ英雄論に異議を唱えているという内容である。この本の内容と永野の見解については次節で詳しく述べる。著者のこの本に対する最大の関心は、メイがこの本を書いた動機を探ることに向けられた。そこで著者は、メイの動機がフィリピン人歴史家たちの構築してきたボニファシオ像を覆すだけでなく、フィリピン革命史像の総体を否定することにあると述べている。そして著者は、メイが本の中で隠している彼のフィリピン革命史像を探っている。

### 2. 『英雄の捏造』を読む

著者の永野は、論文の中で先に述べたグレン・メイの『英雄の捏造』について多くの記述をしている。それによると、メイは過去のフィリピン人歴史家たちの記述方法や資料考証だけでなく、資料そのものの信憑性に疑問を投げかけたという。

著者は、メイのフィリピン革命史像を、「地方権力者層の指導力の下で民衆を率いた独立革命であり、

民衆が独自の革命思想のもとでフィリピンやアメリカと交戦したのではない」とまとめた。過去に公に認められてきたフィリピン通史では、フィリピン革命の主要な担い手は富裕層であるとされてきた。メイは、このようなフィリピン革命史像をフィリピン人歴史学者に突きつけるかわりに、自分とは異なるフィリピン革命史像を提示した歴史学者たちを、資料の信憑性に欠けるとして非難するという「巧妙な罠」を張ったのだと、著者は読み取っている。このように、メイが隠した罠までもを読み取るという、筆者の洞察力は非常に優れていると感じた。

### 3. グレン・メイへの反論

著者が『英雄の捏造』について多くの考えを持ったことは先に述べたが、本節では、この本についての著者の反論を述べる。著者は『英雄の捏造』を読んだ後、「これはフィリピン人にとってきわめて不公平な本だ」という感想を述べている。それは先に書いたように、メイがこの本の中でフィリピン人歴史家たちに罠を仕掛けているからである。

メイの理論に対する反論に用いられたものは、レイナルド・イレートの『フィリピン人と革命』である。著者は、これを読んで感動を覚えたという。なぜならば、永野が感じた「メイの罠」と、イレートの書いた「メイの偽装」というものが一致したからである。イレートはこの本の第九章の中で、メイを批判している。その内容を以下に示す。アメリカはフィリピンを植民地支配下に置くにあたって、フィリピン側に多くの犠牲者を出してしまった。そこで、これらを正当化するには、フィリピン革命は「大衆の蜂起」ではなく、「エリート層の蜂起」である必要性があった。つまり、ボニファシオは大衆層であったのだから、彼がフィリピン革命の英雄であってはアメリカにとって都合が悪かったのである。このようなイレートのメイ批判は、単なるメイ批判であるだけでなく、アメリカがどのようにしてフィリピン史を作り上げたのかを理解する必要性を明らかにした。

ここまでの内容は、筆者もイレートの本からの抜粋を読むことで感じることができた。しかし、著者の永野はさらに、こう付け加えている。「アメリカがフィリピンを植民地支配するにあたり、フィリピン革命をどう認識していたかを知ることが、アメリカの対フィリピン政策の本質に迫る上で必要不可欠であるということをイレートは私たちに提示した」。なるほど、鋭い意見である。多くのページを割いてメイの理論について論じてきた著者であったが、メイの理論の是非が問題なのではなくて、フィリピンのポストコロニアルについての提言が著者の目的であったのだ。上記で引用した記述を挿入することで、筆者を含めた読者たちを、本題へと連れ戻してくれる手法は絶妙である。

著者はイレートの視座に感銘を受けたため、彼の著作、『アメリカ植民地を知る-フィリピン戦争からの百年』を読み、そこから新たな発見をしようとした。そこで、この本の副題とホセ・リサールの短編論文、『フィリピンの今からの百年間』との間にある関連性を感じ取った。これこそが筆者が求めていたものでもあった。冒頭で書いたように、筆者は永野の論文から、今まで行ってきたリサール研究との接点を見出したかった。この瞬間、筆者は予想していた通りの二つの研究の関連性を発見した。

著者は最後に、フィリピンでは「ポスト・アメリカ植民地期」が終わり、ポストコロニアル・スタディーズへの扉が開かれたのだとまとめている。

### おわりに

著者の永野はフィリピンにおける歴史の専門家ではない。この文書は、金融史の研究をしている折に書かれた文章だそうである。当初、筆者はこの二つの研究には何のつながりもないように思えた。しかし、この論文を読むに従い、全く関連のない二つの研究に思いがけない接点があるということがわかった。著者は、一国の金融制度と政治行政制度との間に密接な関係があることに注目し、フィリピンの政治史の中で重要な出来事であるフィリピン革命について深く考えたのだ。考えてみれば、政治と経済には密接な関係がある。現在、いくつかの大学にある、政治と経済とを平行して学ぶ政治経済学部というものの存在を考えてもそれがわかる。ある国の経済状況について考えるには、その国の政治体制が大きく影響する。とりわけ、その国が植民地支配されていれば、宗主国の政府の方針も考えなくてはならな

い。このようなことに気付き、政治史の分野の学習に力を注いだ著者の熱意には驚いた。

自分には未知で専門外の分野の事柄を、自分の研究の更なる進歩の一助とするという行為は、今までの研究者にはない試みであると筆者は思う。たいていの研究者は専門外の分野となると、「自分の守備範囲外だから」などといって、避けてしまうはずだ。しかし、著者は忙しい合間を縫って、フィリピン史の勉強をするという、学生時代に回帰するような気持ちでこの行為に取り組んだのだ。その結果として、著者は自身の研究において直面していた壁を見事に越えたのである。

一見、何も関係のないように見える事柄でも、意外な発見があるということを、筆者はこの論文を通じて知った。今後は自身に関係のないと思われるような分野の事柄にも積極的に触れていくような広い視野を持って、物事を考えていきたい。